

禪師曾我

トモ 団三郎

トモ 鬼王

ツレ 曾我兄弟母

シテ 久上禪師

ワキ 伊東助宗

ワキツレ 同従兵

地は 前は伊豆 後は越後

季は 春

「散りにし花の名残には。く。香ばかり送る嵐かな。

「是は曾我兄弟の人々に仕へ申す。鬼王団三郎にて候。さても兄弟の人々は。過ぎにし二十八日の夜。井手の館へ忍び入り。安々と敵を討ち。其身も即座に討たれ給ひて候。我等兄弟も御供申し候へども。形見の品々を持ちて。故郷へ下れとの御事にて候ふ程に。かひなき命助かり。御形見を持ち。

只今故郷へ下り候。

「使の泣きて帰りしは。く。花を見捨つる雁金。

それは越路に帰る山。是は名高き富士の嶺の。煙見えたる東屋に。帰りかねたる心かな。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早曾我の里に着きて候。先々案内を申さうずるにて候。如何に案内申し候。鬼王団三郎が参りたる由それく御申し候へ。

「何鬼王団三郎と申すか。人までも有るまじ此方へ

来り候へ。さて只今は何の為に来りたるぞ。

團三郎

「さん候面目もなき御使に参りて候。

母

「面目もなき使とは。如何なる事にて有るやらん。

團三郎

「過ぎにし二十八日の夜。井手の館へ忍び入り。安々と敵を討ち。御身も即座に討たれ給ひて候。又御形見の物を持ちて参りて候。是々御覧候へ。

母

「祐経を討つ程なれば。何とて落ち延びざりけるぞ。敵を討つは父の為め。母をば思はぬ子供の形見。

恨めしや。

鬼王

「実にく御歎き尤にて候。先づ箱根へ人を御登せ候へ。

母

「箱根へと聞けば思ひ出だしたり。まづく久上の寺へ参り候へ。

團三郎

「実にく禅師の御事よなふ。たとひ御身は捨人なりとも。

母

「如何なる目をも。

団三郎「水茎の。」

地「筆の立てども覚えねば。涙ながらにかきくれて。

久上の寺に送りけり。く。

シテ詞

「是は久上の禪師にて候。我此間別行の子細候ふ間。

百座の護摩を焼かばやと存じ候。

一同一声

「藤波の。かゝれる木々の梢をば。嵐や寄せて散らすらん。」

ワキ詞

「是は伊藤の九郎助宗なり。さても過ぎにし二十八

日の夜。曾我兄弟の者。井手の館に忍び入り。親の敵を討ち。其身も即座に討たれて候。其弟に久上の禪師と申して候ふを。幼少の時より某養子として出家させ申し候ふを。如何なる者の申し候ふやらん。君聞き召し及ばせ給ひ。急ぎ搦め捕つて参らせよとの御事にて候ふ程に。唯今久上の寺に押し寄せ候。是は早久上の寺にて候。まづく案内を請はうずるにて候。如何に案内申し候。伊藤

の九郎助宗が参りたり。急いで門を開き候へ。

シテ「助宗は何の為に御出でにて候ふぞ。

ワキ「鎌倉殿より搦め捕つて参れとの御事なり。とう
く出で候へ。

シテ「や。助宗は某が討手の為めな。よし／＼尋常に討
死し。御名を揚げて参らせん。抑是は河津の三郎
が末の子に。久上の禪師。

地「墨染の下に忍辱の鎧。悪魔降伏の剣。三尺の長刀

指しかざしたり。討つべき様こそなかりけれ。

地「心得給へ助宗と。城戸を開いて切つて出づれば。

手許に近づき過すな。射取れや射取れ梓弓。足田
の小三郎が進んでかゝるを。長刀取り延べ。法師
の切るとて袈裟がけなり。南無仏無慙やな。

シテ「たとへば沙門の体とて。

地「思ひゆるすも事にこそよれ。唯一命の勝負をせん
と。狩野の源六其外若武者。我も／＼とかゝりけ

れども。禪師は騒がず打物合はせ。こゝやかしこに切り立てられ。門前の外まで引き退けば。是までなりと長刀投げ捨て。護摩の壇上に走り上り。御本尊に向ひて。あびらうんけんにつなぬかれ。礼盤の上より落ちけるを。生捕にせんとして利剣を奪ひ。鎌倉へこそ上せけれ。鎌倉へこそは上せけれ。